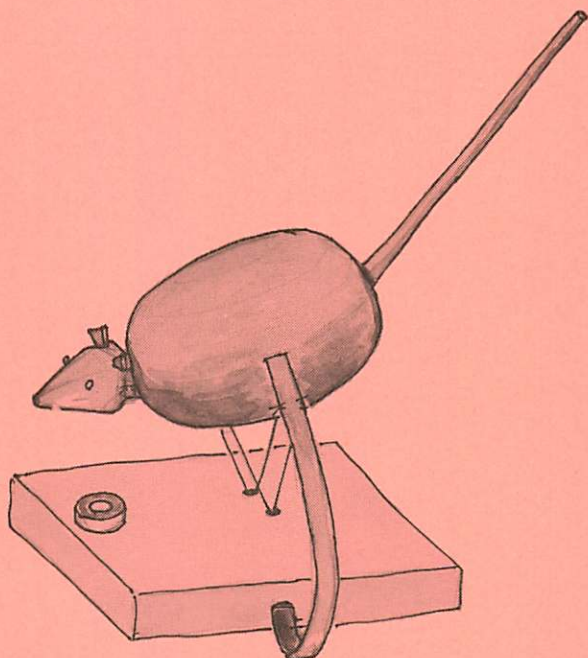


---

尾張町を支えた女たち その弐

---

郷土玩具と共に暮らして



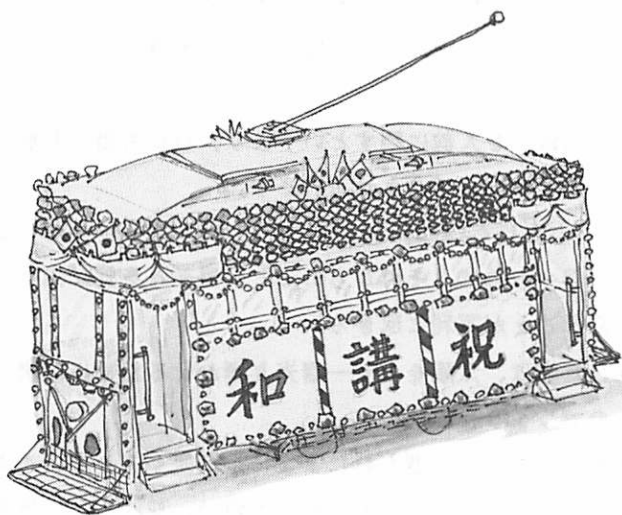
表紙絵 村上隆氏(村上洋品店社長・尾張町商店街振興組合副理事長)

## 目 次

はじめに	.....	1
賑やかな尾張町の店で	.....	2
郷土の人形作りにふれて	.....	4
職人仕事を覚えながら	.....	5
先代からの商売の心がけ	.....	7
縁起ものの飾りを作りながら	.....	9
しんしんと雪の振る日に	.....	11
とある日のお父さんと筆文字のこと	.....	13
私を見た昔の尾張町風情	.....	15
古い遊びを忘れないで(旗源平のことなど)	.....	16
家族に囲まれて	.....	19
あとがき	.....	22

賑やかな尾張町の店で

市電が初めて金沢駅前から尾張町を通過して上胡桃町まで走った時(大正8年1919)、懸作り[かけづくり=橋場町付近]まで見に行っただが、尾張町との緑の始まりやったのかね。大きな鉄の箱のような電車が、道路の真ん中にある線路の上を滑るように走るの、どんだけ見ても不思議なもんやったね。考えてみれば、こんな小さい7つか8つの歳の女の子にすれば、電車が通るほどに広い道の尾張町の界限は、びっくりする程賑やかな、羨ましい街に見えたんや。



それから10年余り、私が尾張町のこの店に嫁入りしたんは、今上天皇陛下の即位のご大典が行われた年(昭和3年)やったね。そやそや、今は平成になっ

とるさかい、きちんと言うたら昭和天皇陛下になるんやね。

あの頃ではあたりまえの17歳そこそこの歳で、もう世間様には一人前の顔をしとらないかん。家のお父さん(主人)の他には知らん人ばっかしで、ちょっと心細うても、街筋の賑やかな尾張町の雰囲気、気を紛らわしてくれたみたいや。

店は、往来のいろんな音が聞こえて来る下尾張町(大手門から橋場町寄り)に入りかけの処で、こじんまりした構えやったね。それでも、昔は参勤交替の行列が大手門を出てから上尾張町(大手門から武蔵寄り)でなく、こちらの下尾張町の方ばかり通っていたとかで、“下”が付いていても格式は“上”なんやと聞かされたわ。

今では、尾張町が上下に分かれとったなんて、若い人はほとんど知りまざらんことやわね。

当時は郷土玩具の他に、飾り付けの仕事もしていて、花電車の装飾までもしとったね。小さい頃に、この街まで見に来た市電と、こんな縁があるなんて面白いもんやね。

普通の花電車の装飾は、外側にいろんなものを飾り付けるんや。うんとお金がある時は、上側を外して中身[車台]だけにして、もっといろんな飾り付けや細工をするんや。そうした外仕事はもっぱらお父さんや男衆が行とったさかい、なおさら、私等のような女は内仕事を手伝うようになってたけどね。

美しい真紅の加賀八幡起上りやら、加賀鳶などの郷土人形や、加賀獅子頭、首振り虎、旗源平なんかの古くから伝わるものなんか、いくらでも仕事はあったね。

他にも、踊りの飾り付け小道具や、雛人形、五月人形も一時しとったさかい、そりゃもう、暇なんかどこ探してもあるはずなかったわ。

ほやけど[だけど]、今から思うと、この家に骨を埋める者が理屈を言うとっても始まらん、と精一杯に体を動かしていると、かえって爽々しい気分になれたのは不思議なもんやったね。

それに、こんな美しいというか奇麗なものを扱わせてもろうて、ほんに[本当

に]私等は幸せもんやったわ。

### 郷土の人形作りにふれて

郷土玩具を作るというても、実際の細かいことは職人さんがすることや。私等が最初にしたことは、出来上がった玩具人形などを紙に包んだり、箱に間違えんと詰めたり、その箱の上にちゃんと筆で書いたりすることや。また、玩具人形の材料や箱を案配よく注文することをしとったね。

それでも、こんなちょっとした何でもないようなことが、実は仕上りの出来不出来を決める肝心なことなんや。気を張らないかんかったね。

お舅(しゅうと)さんにしたら、ちゃんと店の中を守ってくれる私等にこそ、そんな大事なことを覚えてもらってほしかったんやろね。お陰で、いろいろ教えてもらったことで今でも重宝しているわ。



お人形さんは、元々この店の本職で、お姑(しゅうとめ)さんが自分で作っていったんや。近ごろは、テレビでどこそこの雛人形なんて宣伝してるけど、あの時分はどこでも何もかも自分の店で作るのが普通やったね。

「金欄(きんらん)どんすの帯締めながら、花嫁御寮は～」なんていう歌にある、あの錦の切(きれ)に金糸で模様を織った金欄の、人形用のがあるんやわ。それを使って綺麗な内裏雛(だいりびな)を作ってたのや。

お舅さんも、お姑さんも手先が器用で、二人して、つまつま[こつこつ]とお雛さんを作るまさるがや。私等が横において手伝いしていると、見ているうちにいろいろ習えるわけや。

自分等で手間暇かけたせいかね。欲目かも知れんけど、他のどこの店よりも立派に見えるお雛さんを見ていると、ほんまに楽しいもんやったね。

ところが、いよいよ戦争(第2次大戦)になると地方から物を取ろうと思って簡単に送ってもらえんがや。また、いつ着くか分からんがや。それに奢侈品禁止令たらいうて金欄で作った物を売れんがになってしもうたのやわ。まあ、今から思うと本当にいろんな目に会わされたことやいね。

### 職人仕事を覚えながら

お姑(しゅうとめ)さんは、なかなか目端(めはし)の利く人で、この店の人形作りをしっかりと嫁に教えることが一番や！と思うとったんやね。どんな時代になっても、一人前の職人仕事が出来ることこそが大事。そやさかい、自分で私等に教える傍ら、東京から京都へといろんな処の、いろんな先生へ習いに行かすましたね。

店には、ねえや[お手伝いさん]もおったし、外回りの人もおったけど、材料なんかを注文している肝心の者が外へ出るちゅうことは大変やったがや。それでも先生の都合から、2日なり3日なりしか講習会がなかった時でもどうやいね！と言われると、真っ先に行かしてくれたんやね。

お陰で心臓も座って、しっかりと覚えさせてもらうたね。少しくらいのことがあっても、手に職を持つとるさかい何とかやって来れたんやね。厳しかっただけ

ど、本当に感謝させられているわ。

お人形さんも、いいものを作るとなると2～3日では仕上がらんもんや。着物の刺繍もせならんし、頭の髷も東京の専門の処へ出して結うてもろうたりしてると、すぐ日がたってしもうわ。そやさかい、人様に教える時でも、なるべく仕上げの日限を区切らん方が助かるんや。

でも、たっぷりと手間暇かけて、心を込めて作ったお人形さんやと、何んやら人様に渡すのが、惜しいというのか、勿体ないような気持になるわね。

今ではもう歳やから、手先もあんまりいうことを利かなくなつたもんで、人形作りの方は止めてしもうたわ。それに、ここの店には他にすることがたくさんあるんやわ。

“米食いねずみ”を拵(こしら)えたり、“兎の餅つき”とか、昔からの郷土玩具を作るのの手伝いをせならんしね。ただ、加賀八幡起上りや加賀獅子頭だけは河北台の工場で作ってるけどね。

長年のコツコツした積重ねのお陰かしら、昭和30年に“加賀八幡起上り”・昭和35年に“米食いねずみ”、そして今年(平成4年)は“猿の三番叟”が年賀切手になって嬉しいことやわ。

でも、せっかく切手になつても、この頃では、由来も知りまさらん人が増えているようやね。

あの“加賀八幡起上り”は、とにかく縁起が良いことと、「起上り」に掛けて新年や節句の進物に使うたり、病気見舞いにも用いられてるんや。

色が赤いのは、八幡宮の祭神・応神天皇の生まれた時に、真紅の錦で包んだという、その産着姿になぞらえたものなのや。めでたい松竹の模様も描いて、子供達が丈夫に育つことと、幸せを願っているとか。

最初に使われたのは、寛政年間(19世紀末、12代齋広の時)正月の初売りの景物からだそうや。それをタンスにしまつて置けば、女・子供の衣装が増えるとの言い伝えも残っているとか。

そうしたことから、誕生を祝つたり、健康を祝つたり、婚礼に新夫婦の幸を祝つて贈ることが習わしとなったんや。





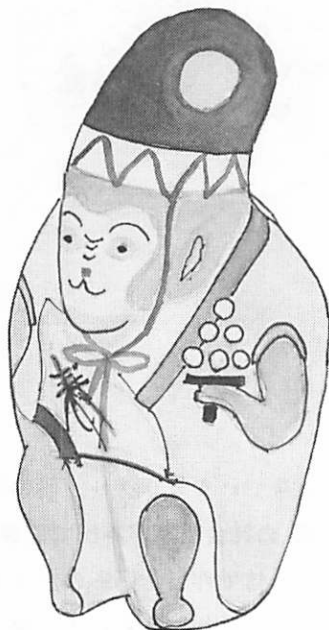
また“米食いねずみ”は、今でいうカラクリ人形の走りなんやて。天保の初め(1830年頃、13代齋藤の頃)の社会経済が不況で飢饉の折、足軽小者の手内職として始まったものなんや。竹で作った弓形のバネを押すと、黒く塗ったねずみの頭と尾が一緒に動く仕種には何んともいえん楽しさがあるわね。これで遊ぶことで、もっぱらお金が殖えるという話も聞いてるけど。

#### 先代からの商売の心がけ

私等で5代目になるというけど、その頃は面白いことに、ここの店構えをあんまし[あまり]派手にしとらんかったがやね。やわやわと[地道に]商売して、無理して目立つことをするもんでない。宣伝なんかすることは、はなっから考えとらんのやわ。そんな外面ばかり良くするより、しっかりとした職人仕事

をする方が大事やという代々の考えなんかね。

そやさかい、尾張町のように大店の並ぶ中であって、ここの店なんか、仕事している私等でさえあきれる程本当に目立たんかった。どうかすると、人によっては、ここの店は何の商売をしてるのか、何で儲けとるのか、よう分からんかったらしいわ。そこら辺が、お舅(しゅうと)さんが思う商売の心がけやったんやね。



もともと、郷土玩具というもんは地味な仕事やさかい。まあ、最近になって観光客が来るようになって、ちょっこし晴れがましいようになったもんやけど、.....。そやさかい、かえって昔からの静かさを知っとると、よう落着かんわね。

その点、お舅さんなんかの心がけには、教えられることが多かったわね。端

(はた)から見てみると、感心する位に朝風呂の好きな人やったね。あの頃の人は皆んなそうやったんかね。毎日の日課というのか、そうせなシャキッとした気持で一日が始まらんかったんやろね。

朝早く、「ねえさ〜ん」と下から呼ばれると、まず最初にお舅さんが風呂屋へ行く準備をするんや。そうして、毎朝5時にはキッチンと銭湯へ行く姿を見届けてから、7時からの朝ごはんの準備やら、一日のいろんなことが始まるんや。

そんでも、昔の人はどこかに筋がひとつ、ちゃ〜んと通っているんやね。お舅さんも、ただ風呂へ行くんでないんや。

風呂から上がった後、朝ごはんまでの間に、向山(卯辰山)の五本松さんへ何十年間も一日も欠かさんとお参りに行くんや。清めた体と心で、神仏にお参りすることで、新しく迎えた一日のけじめをつけてたんやね。

確か、魯山人(ろさんじん)たらしい人に縁があるという料亭の横の、車も通れんような細い坂道を、雨の日も雪の日も登ってたそうな。人様に聞いたら、商いの願掛けで有名な摩利支天堂のある宝泉寺というのが、本当の名前なんやね。私等の頃は、そんな堅苦しい名前よりも、あの立派な五本松が明治の頃まであった処だというだけで皆んな分かつたけど。

今のこの店は、前の処と場所がちょっと横にずってしもうて、しばらくは尾張町でない町名になって寂しい思いをしたこともあったわ。そやけど、市媛神社の隣に店を構えられ、少したった昭和45年には町名がこころ辺りまで尾張町になったのも、あの頃にお舅さんが五本松さんへ通った精進のお陰やろうかね。

やっぱり、尾張町という名前には、いつまでも、私等にとっては何ともいえん情緒と味わいがあるわね。また、この名前を使えることで、何かほっとした気持にさせられとるわね。

#### 縁起ものの飾りを作りながら

せっせと作り物をしていて、やっぱり楽しかったんはおめでたい婚礼の祝い物をしている時やったね。金沢でもちょっと名の知れた大きな家の嫁入り道具

になると、それに見合った恥ずかしくないものを作らないかんもんで、気が張るけど、そりゃ作り上げて行く時は、人様のことやのに何んや私が嫁入りに行くことみたいで嬉しくなったね。

台の上に、縁起ものの鼓や鯛などの祝い物を載せる際なんか、それに使う白生地は1反のものをまるまる全部使うてもうがや。反物の途中では、絶対にハサミを入れたらいかんもんで、ちょうど使い切るのに随分と気骨が折れるけどね。こんなに縁起を担ぐのも、せっかくのおめでたい縁が切れたらいかんちゃうことと、後で引出物として利用することもあったさかいや。

それから、“尉と姥(じょうとんば)”といって、高砂の人形を白生地でちょっとした子供位の大きさで作ったのなんか、今でも懐かしく思い出すもんや。お姑さんが本当に器用な手付きで作って行くのを、私なんか横からちょっと手伝わせてもらうだけやったけど、そりゃもう綺麗なもんやった。

あの飾り物の由来というのは、謡曲の「高砂」の中の「高砂住の江の松に相生の名あり。……松は〔待つ〕に掛けて〕非情の物だにも。相生〔あいおい＝「会い合う」に掛けて〕の名はあるぞかし。……通ひ馴れたる尉(じょう)と姥(うば)は。松詣共に此年まで。相生の夫婦となるものを。」という一節から来てるんや。

縁があって、ずっと習っている謡の先生に訳を教えてもろうたら、“尉は住吉に、姥は高砂の地と、遠くはなれている松でさえ相生の名があるのに、まして私ら人間は情けさえあれば相生の夫婦となるのに不思議はないはず”という、おめでたいことやとのこと。

こんな話を聞かされると、商売第一でただ長いこと(昭和23年から)謡うているだけの私等でも、何やら新しい楽しみも出て来て嬉しいもんや。熊手を持っている翁の人形と、ほうきを持っている媼の人形が並んでいる“尉と姥”の姿も、ほのぼのとして見えるしね。

やっぱり金沢という処は、平生のちょっとしたことの中にも謡のことや、お茶やお花のことが入り込んで来る土地柄なんやね。私等のような職人は、作りものに追われて忙しゅうてなかなか自分で暇を見つけられんけど、こんなこと

がすぐ身近にあると思うだけでもユトリが生まれるみたいやね。



近ごろの若い人を見ていると、やたらに時間を急いで(せいて)ばかりいて、こうした情緒を知りまさらんようになる人が増えているけど、ちょっと寂しい気持にさせられるようやわ。

しんしんと雪の降る日に

不思議と私等が嫁いだ頃は、雪がようけ[たくさん]降った気がするのや。ようさり[夜]が妙に静かな時は、いつの間にやら雪がどっさり積もっていて、朝になって目が覚めると庭先[中庭のこと=奥行き]の深い金沢の商家では、昔は大雪になるとここに屋根雪を落としていた]がそりゃもう真っ白になっとるんや。

そやけど、家中が皆んな職人みたいなもんで、ちょっとの間でも惜しんで作り物をして外へも出んさかい、あんまし雪のことが気にならんかったね。することがあってあって、大変だったのやさかい。それに、店番であせない[忙しい]、という程にお客さんも来られんかったしね。

昼は昼で何やかやとあせない仕事をし、晚ごはんが済んだらまた仕事をするんや。気がついたら、ようさりの12時過ぎになることなんか、しょっちゅうやったね。

雪が降っている時は、他(ほか)さんでは普段の仕事が満足に出来んいうて、下仕事というたらいいのか、今でいう準備仕事をしている処が多かったようやね。

そやさかい[だから]、私等のように郷土物を作っている処では、天気のおんばい[具合]に関係せんような家の中でする仕事が主やったもんで、尚更に精出して仕事ははかどった[効率良い]気がしたわ。雪で街の中が静かで、あんましいろんなことに煩わされることもなかったし、却って良かったね。

ただ、昔は東京にも一時(いつとき)店を出していたことがあったもんで、逆にこちらの身動きの取れん折の方が、向こうから注文があって、あせない毎日に追われとったのを覚えとるわ。郷土玩具は、金沢のような地方よりも都会の方で人気が高いみたいなんやね。こちらは、こんなに雪が積もつとるがに、処変われば違うもんなんやと、つくづく思わされたもんや。

ま、そんなふうにも昔の年寄りに仕込まれたのは、私等としては良かったと思うわ。下手に遊んでいるよりも、いつも何かしら体を動かしとらんと落着かんようになってしもうたし。家の者から、別に急がんでもいいなんて言われると、尚一所懸命になってしもうたりね。

あの時分の商売人というたら、隣近所の尾張町に限らんと、金沢の商売しとる人は皆んなが働き者やったみたいやね。

厳しきはそりゃ厳しかったけど、そんな訳の分からんことは言うまさらんかったわ。たまには、ちょっと何処かへ行きたいと言うた時なんか、お姑さんは自分が出掛けんでもサッと外へ出してもらえたね。

そやさかい、私等が今度は皆んなを出してあげるようにしとるわね。してみると、案外と楽しいことなんやね。

とある日のお父さん(主人)と筆文字のこと

昔は、今のように便利な冷房なんてなかったもんで、夏の暑い盛りになると、この辺では浅野川の河原なんかへ行って皆んな涼んでいたわね。さらさら流れる麻のような水の音色と、ひんやりした医王山(いおうせん)からの香りが、蒸し暑さを紛らわしてくれるんや。そやさかい、懸作り(橋場町)から浅野川の付近には、いつの間にやら芝居小屋や大道芸人がようけ集まっとったね。

ちょうどそんな人等と同じようにして、涼みがてら家のお父さん[主人]なんかは、店の中から椅子を出してきて、それを道端に置いて近所の人と一緒にあって大好きな野球の話始める始末。何しろ、どこの会社でも自分からコーチをかって出掛ける位の野球好きやし、高校時代は選手だった位やもの。

女の私等と違う、やっぱり男のお人さん同志や、そんな話になっただけにすぐ何人かになって、賑やかになるんやわ。私等から見ていると、何となく和やかな雰囲気、ちょっと羨ましい気にもさせられたわね。

時間のたつのも忘れたようになって、気が付くともうようさり[夜]近くの薄暗さになっとるがや。

その、ようさりがあれなんや。ほら、お父さんもやっぱり男のお人さんや。仕事や何かの付き合いで、店のすぐ後ろの主計町[かぞえまち=主計町茶屋街]や、橋を渡って東[東茶屋街]へ行くこともあったしね。

そうすると、盆と暮れに先楳から「まいどあんやとございみす」と挨拶に来るんや。暮れなんかは、“かぶら寿司”まで丁寧にもらったしね。

あれはこの辺独特のもので、宵かぶの独特の香りと、サクサクとした歯ざわりに、靴漬けにした麹(ぶり)の味がどんなに活きるかで味が決まる難しいものなんや。下手にしめ鯖(さば)なんかを使うたら、何もかも台なしになってしまう程のもんやさかい、キチンとした老舗の漬物屋さんのものでないと、人様に持って行けん位に気の使うものなんや。

勿論、私等が片手間で作る“かぶら寿司”とは、一味も二味も違うものを吟味して持ってくるんやろうけど、それだけのものを持って来る程に、お父さんもごひいきさんになってたんやね。

で、今でいう請求書が一緒に来るんやけど、これが巻き紙になっとるんや。横に広げると和紙に綺麗な筆文字でさらさらと書かれていて、感心するんやね。そうやそうや、お父さんが市会議員の選挙へ出た時なんか、不思議なことにこの巻き紙がちょこし[少し]長くなったようやけど.....。何というても、今どきの万年筆やボールペンなんてものと、まるで味わいが違うし。あの流れるような文字と、墨の黒さは、気持がすっきりするようや。また、あの頃は筆文字でないと人様に通用する文章として見てもらえなかったことも確かなことやったね。





私等なんか向かい側の筆屋さんへ、人形の箱書きに使う筆を買いに、よく行かされたのを覚えとるわ。そんでまた、お向かいさんが筆にこだわる職人気質の方で、筆やら墨のいろんなことをたくさん教えてもろうたわ。

いい筆を選んで、硯で良く墨を擦ったものでないと、箱書きの文字が奇麗にならんやわ。職人さんが、人形の顔に筆を入れるのも大変やけど、箱書きも職人芸の大事なことやさかい。お父さんや、あの子[息子]の書く筆文字を見せてもろうと、キチンと収まるものが収まって気持が良いもんやった。

いくら真似ごとやいうて、印章やら機械文字(ワープロのこと)を使うても、心がこもったらんさかい、やっぱり何か物足りないやね。

#### 私の見た昔の尾張町風情

私等のあの頃は、除夜の鐘が鳴っている最中はまだ仕事をしとる盛りやったね。そして一晩、寝んと一所懸命に年内の仕事をするんや。してもしても、片付かん程に仕事があったんも、今でいう家内工業やったからかも知れんね。

やっと、元旦の朝を迎えてから、まだ残っている仕事の合間に店先の飾り付けをするんやわ。この店が休みやから出来ることなんやけど、新しい年に合わせて正月の物を並べるのも一騒動をせなならん。

何しろ、前の日[大晦日]までは天神堂を作りながら売とったんやさかい。あれも、神殿や鳥居や玉垣を小さくしたもんを木で作るから、結構手がかかるんやわ。

作るのはほとんど職人さんがしてたんやけど、中へ入れる旗やとか、金欄(きんらん)で仕立てた飾り付けの三種の神器のようなものとか、土偶の天神さんやその家来衆、こまいぬ、太鼓なんかの細々としたものは私等がしとったんやわ。

男の子が生まれると、この辺の人が買ってくれて12月に入ると飾とったもんやね。前田のお殿様のご先祖が、天神様で有名な菅原道真公やといわれとることから、学問で賢くなるようにとの縁起を担いで飾ることが、ずっと続いてたと聞いているわ。

本当に熱心な人は、天神町の榑原天満宮まで、毎月25日にお参りに行ったと聞いとるわ。けど、そこまでするのは、普通の人より、案外商売家のおかみさんやったと思うわ。商売と信心は、付いて回ったもんやったさかい。

天神堂は、その家にもよるけど、だいたい正月の15日まで飾るますさかい、商売としては年内に終わらないかんのやわ。そうせな、店屋としては正月もんを売れんことになるし。

正月もんとして売とったのは、羽子板とか、東京の店の関係で熊手までも並べとったね。ちょっと、今の店では考えられんものばっかしやったね。で、2日になってようやく店を開けると、名士の人は皆んな芸者さんを連れて尾張町を歩いてまさるがや。それで自慢しとるつもりなんやろかね。何しろ、あの頃は懸作り[橋場町]から尾張町の通りにかけての賑わいは大したもんで、金沢のどこでも、また北陸一帯を見回しても並ぶ処がなかった、と言われとった程やから、尚更やったんやろね。

#### 古い遊びを忘れないで.....旗源平(はたげんべい)のことなど

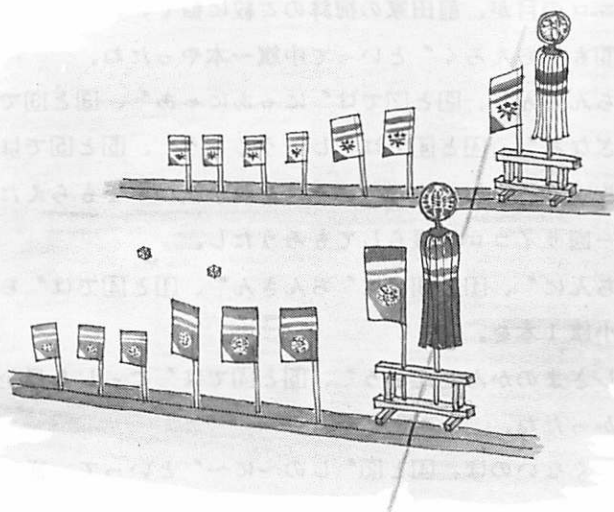
加賀のお殿様は、江戸時代から徳川幕府にはよう尽くしましたけど、心の中では何かあったらいかんと思うて、いろんなことを考えとったんやね。獅子舞いにしても、表向きの華やかさとは別に、剣術の稽古になってるんやと聞かされたことがあるさかい。

同んなじように、旗源平も何か別の意味があったんかね。戦さのことが、そのまま遊びになってるのも珍しいことやしね。近ごろは、いろんな面白いゲームたらしいもんがあるけど、私等の体にしみ込んでいるような古い遊びやさかい、忘れないで欲しいもんや。

あれは、纏(まとい)から始まって、大旗、中旗、小旗と種類と数がたくさんあって、作る方からは、結構いじっかしくて[わずらわしくて]大変なのやわ。高いものになると、縮緬(ちりめん)や羽二重(はふたえ)で作るんやけど、そんな時には私等の仕事やったね。お舅さんや、お姑さんの知っていたずっと前から作とったと聞いとるさかい、随分と古い歴史があるんやろね。

普段に遊ぶものは、近ごろでは紙に印刷したものを平べったい竹の棒に張り付けるんやわ。源氏側は青色の笹竜胆(さきりんどう)を描いた白い旗を使うし、平氏側は揚羽蝶(あげはちょう)を白く抜いた赤い旗を使うて、両方に分かれるんや。サイコロを2ヶ使って、その賽(さい)の目によって小旗から纏へと、順に取り合いて行くんやわね。相手の纏まで取れば、勝ちや。

この頃のもの、纏や旗を立てて置くための台のあるものもあるけど、ついこの間までは、畳と畳の縁取(へりどり)の間に突き刺しとったもんや。竹の棒が平べったいのも、刺し易いためなんやわ。畳一枚でお互いが向かい合くと、ちょうど遊ぶのに具合がいいんやね。



それでも、時代の流れというものは、本当に怖いもんやね。今だ、洋間が当たり前になってしまおうて、畳のことを何んも知らんがになってしまおうとる。

畳の縁取の意味も知りません。ずっと昔に、貴い人が座る場所だけゴザや畳を敷いたもので、端がバラバラにならんようにとかで布の縁を付けたのが始まりなんやそうや。

ほら、あの内裏雛(だいらびな)が、一枚の畳の上に座っている姿やがね。それが、だんだん贅沢になって、床一面に畳を敷くようになって、今度は絨毯(じゅうたん)になったもので、大切な畳を大事に使うための縁取のありがた味を忘れてしもうとるんやわ。残念なことや。

いよいよ遊び出すと、もう自分を忘れるというたらいいんかね。サイコロの振った目に合わせて、皆んなであげる掛け声で、何やらもう時間の立つのも忘れてしもうて、小さい頃は、よく親に遅いと言われたこともあったね。

それでも、あの懐かしい節回しは、今でもはっきりと覚えとるわ。

⑤と①が出ると、“うめがいち”といって小旗十本または中旗一本を取れるんや。⑤のサイコロの目が、前田家の梅鉢のご紋に似ているから、こう呼ぶらしいけど。①と⑥も“ちんろく”といって中旗一本やったね。

①と①では“ちんちん”、②と②では“にゃあにゃあ”、③と③では“さんざん”とか“さざなみ”、④と④では“しゅうじゅう”、⑤と⑤では“ごんご”、⑥と⑥では“じょうろく”といって、それぞれ小旗二本をもらえたね。

それに、もう一回サイコロを振らしてもろうたし。

①と②では“ちんに”、①と③では“ちんさん”、①と④では“ちんし”といっ  
て、それぞれ小旗1本を。

④と③では“しさまのかんかんとう”、⑤と④では“ごっしり鼻かみ”といっ  
て何も取れなかったね。

一番、出て欲しくないのは、④と②“しの～に～”といって、逆に相手に中旗  
一本を返すという時なんや。

喋っているよりも、まあ一回やってみまっし。こんな面白い遊びは他にないから。

## 家族に囲まれて

今ではあの子[息子]の時代になって、そりゃ商いのいろんな付き合いで忙しい毎日を送っとるわね。でも、人形の箱書きの字を書いたりするのは、あの子でないと出来んという職人の仕事も持っとるがや。そやさかい[だから]、いいかげんのところで付き合いを切り上げて帰って来んと、後が大変になるがを自分でよう分かっとるさかい、人に言えん苦労をしとると思うしね。

孫にしたって、段々にお父さんの仕事が引き継がれて、時間がいつの間にか取られてしもうて、あせない[忙しい]毎日を送っとるのが良く見えるがいね。今日は東京のデパートで展示会、明日は大阪で、と飛んで回って、なかなか金沢どころか家でも落着けんみたい。

かわいそうやと思うけど、男の人の世界のことは私等がしゃしゃり出て構うことはならんさかい。せめて、陰ながら少しでも手助けになったらと考えて、こんなお婆ちゃんでも体が動く限り店番でも何でも、包装紙で品物を包んだりして精一杯に私の出来ることをするだけや。

それでも、ほろりと嬉しいのは、孫がこの間ようやく嫁をもらう時、私が別に家を建てまっし、と言ったがに、一緒に住んでくれたことやね。「皆んな今まで一緒に居ったのに、何んで二人だけ別れて暮らさないかんのや。」と、ごく普通に話してくれた顔を見て、頼もしさとこれからの店の地盤を感じさせられたしね。

近頃は、何か安心して、ひ孫煩惱にどっぶりしてるわね。でも、蛙の子は蛙というのかしら、私ら家の者が仕事している処に来たがって、ヨチヨチと歩いていつの間にか横に来とるがや。そして、一人で手伝いしとる気になって、危なっかしげな手つきで何やかやと、まだ恰好にならんものを作って、「おばあちゃんどうや」と言う顔をされると、もう何も返事出来んね。

それに、この間はあだけて[いたずら]るのかかと思うていたら、自分でちゃべちゃべ[小賢しく]と能のビデオテープをどこかで見つけて来て、じ〜っと見てるがや。そしてから、「おばあちゃん、あれは”高砂(たかさご)”なの。これ

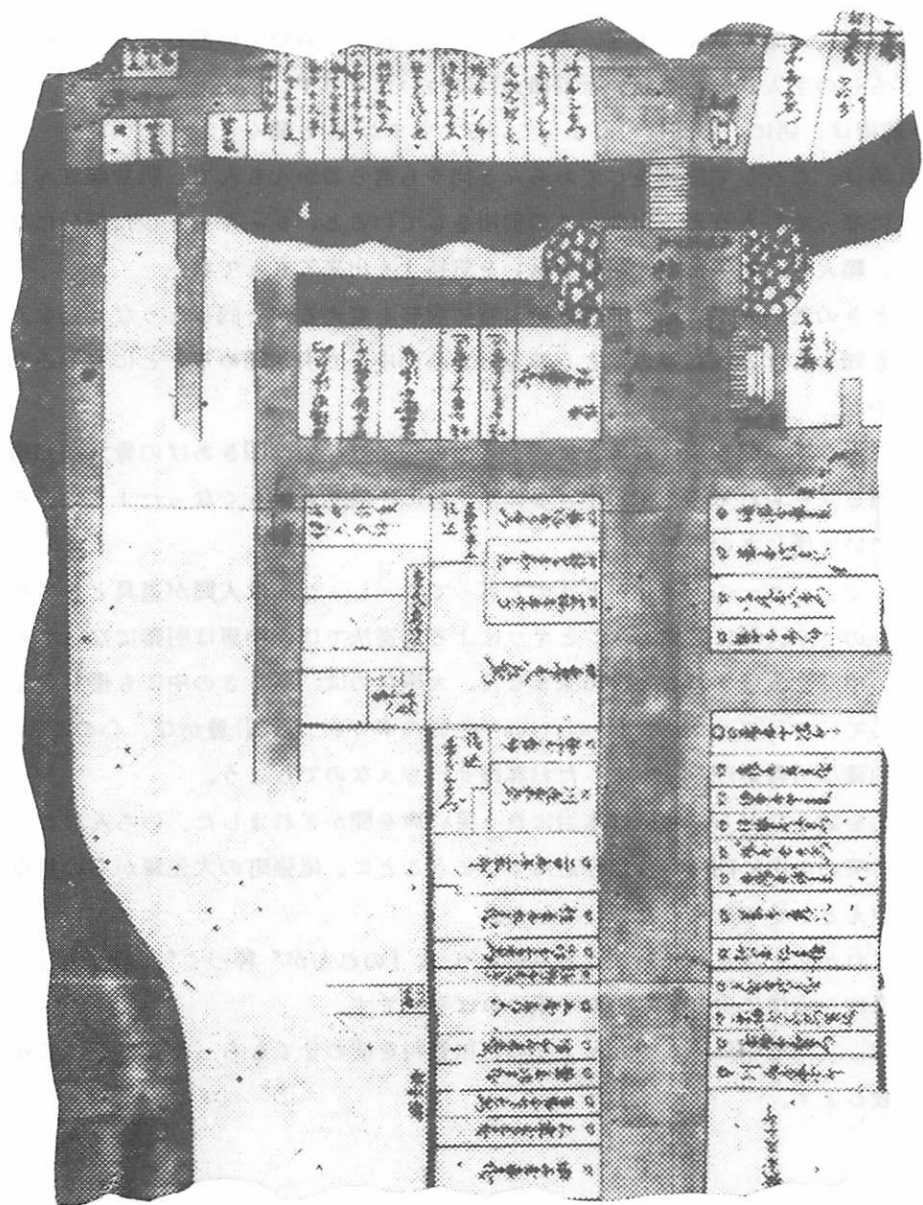
は“竹生島(ちくぶしま)”なの。」なんて聞き出すようになると、何かこう胸の付近が暖ったかくなるようで。

私等が習っている謡も、結局あの子や孫には根付かんかったけど、代をまたいで謡の縁が続くような気がして来たわいね。今まで続けたことが無駄でなかったと感じられるようで、また嬉しさを見つけたみたいやね。

やっぱり、いくら世の中が見た目に奇麗になって来たというても、何んでもかでも古くさいいうて途中で切り捨ててしまおうてはいかんわ。残して行くもんは、きちんと続けて守ってほしいわね。

中島澤子・媼(おうな)について

明治四十四年九月一日生。昭和三年に中島めんやへ嫁ぐ。先代より、筋が一本通った職人技術を受け継ぎながら、夫と共に、郷土玩具・人形を中心とした家業の発展に尽くす。



## あとがき

……と語り終えたとき、ふとチョコンと座った着物姿の前を見ると、洗いざらしの手入れの行き届いた前掛が目についたんです。

「前掛は、店にいる間はいつもしているんですか！」と聞くと、私等は、こうして前掛をしておらんと何やら落ち着かんもんで、肌身離せんようになっしょうとるがや。この前掛をしていると、シャキッとした気分になって、職人さんの手伝いや店の手伝いを気持よく出来るもんでね。今どきの若い人が、仕事の時と遊ぶ時に服装を変えるがと同じようなことなんかも知らんけど、私等のはもうちょっと心の中まで引き締めることになるみたいやね。

こんな話を聞き続けるほどに、上っ面の理屈でない、叩きあげの骨太な知恵を感じさせられるのです。小さな体が、急に一回りも大きくなったような、それでいて優しさのある……。

コンピューターの情報化がどうのと言っても、しょせんは人間が道具として使うものです。単に電気のオンとオフによる二進法では、物事は明確になっても、その中間を表現することは出来ません。大事なものは、厳しきの中にも優しさを備えて、グラデーション(gradation=色彩のボカシ・諧調)豊かな、心のこもった的確な情報処理を基本にしたお客様サービスなのでしょう。

話を聞きながら、今回は本当に良く笑い声を聞かされました。いろんなことを、笑いの中に朗らかに包み込んでしまうことに、尾張町の大先輩からの貴重な教えとさせてもらった思いでした。

これからも益々お元氣なことを願いつつ、「のれんが”粋づく”あきない街」の息吹を皆様にも少しでも感じて頂ければ幸いです。

尚、文中で中島めんやさんよりの各種資料を使わせてもらったことを、ご報告致します。



発 行 = 1992年5月吉日

著 者 = 石野 瑠一

さし絵 = 村上 隆

発行所 = 金沢市尾張町1丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会